千葉開府
Road to
900
since 1126

令和3年8月21日(土) 13:00～17:30

千葉開府
Road to
900
since 1126

千葉市制100周年記念

第3回 千葉氏サミット

～千葉一族がつなぐゆかりの都市～

■制作:千葉氏サミット実行委員会

千葉氏サミットとは

●目的

「千葉氏」という歴史的、文化的資源を通じた相互交流により関係自治体が友好関係を深め、それぞれの地域の活性化に資すること

●参加都市

岩手県一関市、宮城県涌谷町、福島県相馬市、南相馬市、千葉県千葉市、成田市、佐倉市、酒々井町、多古町、東庄町、岐阜県郡上市、佐賀県小城市

千葉氏サミット共同宣言

人口減少・少子超高齢社会を迎え、各自治体が将来においても持続的に発展していくため、地方創生に向けた様々な取組みが行われています。

本日、サミットに参加した千葉氏にゆかりのある自治体は、社会が大きく変革した中世において、いずれも「千葉」一族によって、まちが成立し、発展をとげてきた歴史を持っており、血縁の深い絆や厚い信頼の上に、互いに固く結束していたことをここに再び確認いたしました。

この縁を大切にし、これからも「千葉氏」という共通の歴史的、文化的資源を通じた相互交流により友好関係を深め、それぞれの地域の活性化に向け経済や観光、防災など様々な分野での連携を促進するとともに、次のような取組みを進めることとし、ここに宣言いたします。

一、「千葉氏」の全国的知名度の向上を目指します。
一、「千葉氏」に関する歴史や文化について、「日本遺産」認定を目指します。

●沿革

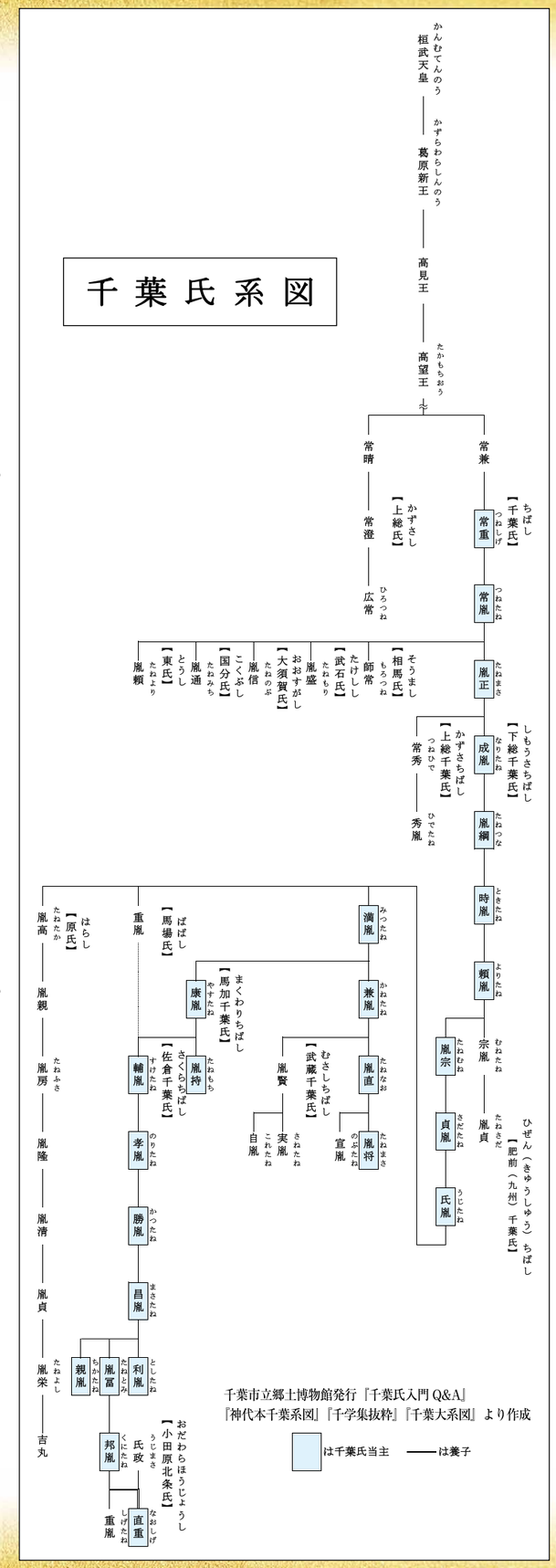
平成 28 年　8 月 21 日	第 1 回千葉氏サミット開催 千葉氏サミット共同宣言
平成 28 年 12 月　1 日	千葉氏サミット広域連携会議　設置 参加都市：岩手県一関市、宮城県涌谷町、福島県相馬市、南相馬市、千葉県千葉市、佐倉市、酒々井町、多古町、東庄町、岐阜県郡上市、佐賀県小城市（11 都市）
平成 30 年　5 月 26 日	第 2 回千葉氏サミット開催
平成 30 年　6 月　1 日	千葉氏サミット広域連携会議に千葉県成田市が加入
令和　3 年　8 月 21 日	第 3 回千葉氏サミット開催

千葉氏年表

元号	西暦	項　目
寛平元年	889	上総介の高望王が、「平」の姓を賜る。
承平5年	935	平将門の乱が起る。（～天慶3年（940）） 平忠常の乱が起る。（～長元4年（1031）） 千葉常胤生まれる。
長元元年	1028	
元永元年	1118	
大治元年	1126	千葉常重、大椎から千葉に本拠を移す。
保元元年	1156	保元の乱が起こる。常胤、源義朝に属して戦う。
治承4年	1180	源頼朝が石橋山の戦いに敗れ、房総半島に逃れる。 常胤が頼朝に味方する。この時、常胤が鎌倉を本拠にするよう頼朝に勧める。 富士川の戦い。常胤は頼朝に、上洛よりも関東の制圧を優先するよう勧める。
元暦2年	1185	壇ノ浦の戦いで平家滅亡。千葉氏は九州に領地を得る。
文治5年	1189	常胤、奥州藤原氏との戦いに東海道大将軍として参加する。 奥州藤原氏の滅亡後、千葉氏は東北に領地を得る。
建久10年	1199	頼朝が死去。
建仁元年	1201	常胤が84歳で死去。
宝治元年	1247	執権北条時頼が三浦氏を滅ぼす（宝治合戦）。 上総千葉氏の千葉秀胤が北条氏に滅ぼされる。
文永11年	1274	元寇(文永の役）で、千葉頼胤が博多でモンゴル軍と戦う。
弘安4年	1281	元寇(弘安の役）で、千葉宗胤がモンゴル軍と戦う。
元弘3年	1333	鎌倉幕府が滅亡。この時、千葉貞胤は幕府の滅亡に活躍する。
建武3年	1336	室町幕府の成立と南北朝の争い。貞胤ははじめは南朝に味方するが、後に北朝方の足利尊氏に降伏して当主の地位を守る。この後、千葉氏は下総千葉氏と肥前千葉氏に分裂する。
康正元年	1455	千葉胤直・宣胤親子が一族の馬加康胤と家臣の原胤房に討たれ、千葉氏本家が滅亡。 康胤、千葉氏当主となる（馬加千葉氏の成立）
康正2年	1456	胤直の甥千葉実胤・自胤兄弟が武蔵国に逃れ、武蔵千葉氏が成立する
文明10年	1478	太田道灌が、武蔵千葉氏とともに千葉孝胤と戦う。(境根原合戦)
文明16年	1484	このころ、本佐倉城が千葉氏の本拠となる。
永正15年	1518	足利義明が原氏から奪った生実城に入る。(小弓公方の成立)
天文7年	1538	義明が北条氏綱に討たれ（第一次国府台合戦）、小弓公方が滅亡する。
永禄3年	1560	千葉胤富が香取地域を攻撃した里見氏家臣正木時茂と戦う。
永禄7年	1564	里見義弘が北条氏康に大敗(第二次国府台合戦）。
永禄9年	1566	上杉謙信が原氏の居城臼井城を攻めるが、千葉氏と原氏に撃退される。
天正5年	1577	小田原北条氏と里見氏が和睦。 里見氏の千葉氏領国への侵攻が止む。
天正13年	1585	千葉邦胤が家臣により殺害される。
天正17年	1589	北条氏政の子が千葉氏を継承し千葉直重を名乗る。北条氏の千葉氏支配が完成する。
天正18年	1590	豊臣秀吉と北条氏との合戦が始まる（小田原攻め）。 直重が小田原城に籠城する。 北条氏が秀吉に降伏し、千葉氏・原氏は秀吉に領地を没収される。

千葉市立郷土博物館発行「千葉氏入門 Q&A」をもとに、千葉氏サミット実行委員会作成

千葉氏系図



千葉市立郷土博物館発行『千葉氏入門 Q&A』
『神代本千葉系図』『千学集抜粋』『千葉大系図』より作成

は千葉氏当主　——は養子

一関市（いちのせき）

◆まちの概要

一関市は、岩手県の最南端、東北のほぼ中央に位置し、仙台市と盛岡市の中間地点にあります。人口は約112,000人、面積1,256.42㎢で古くから交通の要衝として栄え、岩手県南、宮城県北エリアの中核としての役割を担ってきました。

平成25年8月に、当市を含む北上高地の南部地域は、宇宙誕生の謎などを研究するために世界にただ一つ建設される国際研究施設「国際リニアコライダー（ILC）」の国内候補地として選定されました。市では、次の時代を担う子供たちが、夢と希望をもって活躍できる地域となるよう、「ILCを基軸としたまちづくり」を進めています。

また、日常生活圏が同じ宮城県･岩手県際に位置する「栗登（くりと）一平（いっぺい）」（宮城県栗原市、登米市、岩手県一関市、平泉町）のエリアにおいて、人口減少、社会構造の変化に対応した施策の展開や観光や移住定住の連携事業に取組むなど、県境を超えた広域連携にも力を入れています。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

葛西時代、その領内いたるところにおいて勢威を誇っていた千葉一族の始祖は、千葉介頼胤と言われています。長坂唐梅館城主千葉氏も頼胤を始祖としております。しかし頼胤、その人について伝わっていることは様々で、何れが真実を伝えているものか知る由もありません。

長坂千葉系図によると、頼胤は千葉介常胤の七男で、平泉藤原氏滅亡後、葛西氏の直々の家来として伊沢百岡と唐梅館の二城を源頼朝から与えられ、奥州に下向し、建久2年（1191）、その子良胤とともに百岡から唐梅館に移り住む。以来、約400年間に渡り栄えたが天正18年（1590）葛西氏滅亡によって領地を失い、南部家の家臣となりました。

居城唐梅館跡は、東山町長坂の町並の北方、唐梅館山の頂にあります。本丸をめぐる西方の土壇上には初代城主、千葉介頼胤の供養碑が建っております。

本丸に建つ千葉介頼胤供養碑

本丸入口

◆まちの自慢

一関市は世界遺産のまち･平泉に隣接する、岩手県南の玄関口であり、中東北の観光の拠点ともなっています。市内には、舟下りが楽しめる名勝･日本百景「猊鼻渓（げいびけい）」やダイナミックな景観と空飛ぶだんごが人気の名勝･天然記念物「厳美渓（げんびけい）」など風光明媚な多くの観光地があるほか、「全国地ビールフェスティバル」、「一関･平泉バルーンフェスティバル」、「全国もちフェスティバル」など、子供からお年寄りまで楽しめる数多くのイベントを開催しています。

バルーンフェスティバル

涌谷町（わくや）

◆まちの概要

宮城県涌谷町は、宮城県の北東部に位置し、面積は82.16㎢で、仙台駅までの所要時間は1時間程度となっています。

涌谷町は、天平21年（749）に我が国において初めて金を産出した地です。黄金900両（約13kg）を奈良の都に献上し、東大寺の虚舎那仏の造立へと大きく貢献しました。時の天皇であった聖武天皇は、このことを大いに喜び、年号を「天平」から「天平感宝」へと改めるほどでした。

この時、万葉の歌人･大伴家持は、聖武天皇が全国に出した詔（みことのり）に応じて、「天皇の御代栄むと東なる陸奥山に金花咲く」と万葉集に残る歌を詠んでいます。このことから、万葉集に登場する地名の中で北限の町でもあります。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

涌谷町は、江戸時代にこの地域を治めた伊達家一門「涌谷伊達（亘理）氏」の居館「涌谷要害」があったところです。現在の市街地はこの涌谷要害を中心に小城下町を形成しており、往時の名残を所々に見ることができます。

涌谷伊達氏の遠祖は、千葉介常胤の3男である武石三郎胤盛です。文治5年（1189）、胤盛は父常胤とともに奥州合戦に従軍して功績をあげ、源頼朝から現在の福島県北部~宮城県南部の「宇多･伊具･亘理」3郡を拝領しました。その後、亘理郡へ移住、「亘理氏」と名乗るようになったと伝わります。そして、天正19年（1591）、亘理元宗･重宗父子が「亘理」から「涌谷」へ移転、涌谷の町づくりが始まりました。

町内には涌谷伊達氏の氏神を配る妙見宮（現在は神明社）があり、地域の拠り所として祀られています。

◆まちの自慢

涌谷町黄金大使で声優の安野希世乃さんの協力のもと、酒造好適米「蔵の華（涌谷町産）」を100%使用した、純米大吟醸「稀世」を醸造しました。

安野さんの名前の一字「希」に「実り」を意味する「のぎへん」を加えた「稀（まれ）」と「世」を組み合わせた「稀世（きせい）」と、安野さんによって名付けられました。

その稀世という名には、「涌谷町とのコラボ酒として、世に稀な美味しさの、唯一無二のお酒になってほしい」という安野さんの願いが込められています。

ラベルは、凛として洗練された女性をイメージ。一輪の桜を中心に、均一に水面に広がる波紋と、流れるような書体で書かれた「稀世」でデザインされています。

「稀世」は、町内小売店で販売されるとともに、ふるさと納税の返礼品として活用されています。

相馬市（そうま）

◆まちの概要

相馬市は、福島県の東北端にあって、西に阿武隈山地が連なり、東は太平洋に面しています。江戸時代初期の慶長16年（1611）に相馬氏の本拠が中村城に移され、現在の相馬市の基礎となる近世城下町が形成されました。江戸時代後期になると、東北諸藩を襲った天明･天保の大飢饉により相馬中村藩も大きな被害を受けましたが、二宮尊徳の農業復興施策である報徳仕法を推進し、藩財政を立て直しました。その時の二宮尊徳の教えは現在も市民に根付いています。

千有余年の歴史を誇る国指定重要無形民俗文化財相馬野馬追は見どころの一つですが、新たな観光の柱として、天然芝コート3面、人工芝コート2面を有す光陽サッカー場をはじめとした市内の各種スポーツ施設も観光資源と位置づけ、スポーツ観光にも積額的に取り組んでいます。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

相馬氏は、系図では平将門を祖とし、桓武平氏良将を称しています。それによると将門は下総国相馬郡（茨城県北相馬郡）を領し、相馬小次郎と称して相馬氏の祖となったとされています。

将門から10代後の師国には嫡子がいなかったため、千葉常胤の次男師常が養子となって相馬氏を継承したとされています。文治5年（1189）の奥州藤原氏追討で相馬師常は実父･千葉常胤とともに功をあげ、源頼朝から多くの所領を与えられました。

相馬師常も陸奥国行方郡（現在の南相馬市）を与えられ、本領の下総国相馬郡とともに支配しました。師常から6代目の重胤は一族内の所領をめぐる対立などから、元亨3年（1323）に一族郎党を従え、本領であった下総国相馬郡から陸奥国行方郡に移住したといわれています。

その後、慶長16年（1611）になると時の中村藩主相馬利胤が行方郡小高から現在の相馬市中村の地に居城を移し、政治経済の中心地として整備、北辺に対する強化を図りました。

現在の相馬市の基礎となる城下町が形成されることとなりました。

天之御中主神をまつる相馬中村神社

史跡中村城跡

◆まちの自慢

海と緑が織りなす美しい自然と温暖な気候に囲まれた相馬市は、県立自然公園松川浦を始めとする豊かな自然環境に育まれた、相馬野馬追や相馬民謡などの歴史と文化が残るなど様々な魅力があるまちです。また、江戸時代を通して相馬氏の居城である中村城の城下町だった歴史を活かして、本市では、中心市街地の公共建築物に統一感のある和風デザインコードを策定するなど、歴史を今に伝える街づくりを行っています。また、青のりやイチゴなど、山海の美味しい特産品があります。

南相馬市（みなみそうま）

◆まちの概要

平成18年1月1目、旧小高町･旧鹿島町･旧原町市の1市2町が合併し南相馬市が誕生しました。旧市町の区域ごとに地域自治区となっており、「小高区」「鹿島区」「原町区」に移行し住所に名称を残しています。

福島県の太平洋沿岸北部、いわき市と宮城県仙台市のほぼ中間に位置し、面積398.58㎢、緑深い阿武隈の山すそに広がる豊かな平野、その果てに連なる太平洋のなぎさ、海洋性の気象にはぐくまれた豊かな自然環境のまちです。

この豊かな自然は、市内に現存する延喜式内社の縁起に見られるように、古くから当地方開発の大きな要因をなしてきました。

相馬野馬追のメイン会場となる雲雀ヶ原祭場地は原町区に、野馬懸の会場となる相馬小高神社は小高区にあります。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

相馬氏は平将門が遠祖ともいわれています。始祖は千葉常胤の二男相馬師常で、下総国相馬郡を領したことから相馬を名乗りました。師常は父常胤とともに奥州合戦で戦功をあげ、父常胤から本領のほかに陸奥国行方郡（現在の南相馬市･飯舘村）を与えられました。師常から3代後の胤村の五男師胤は行方郡に多くの所領を譲り受け、その子重胤が元亨年間（1321−1323）に一族の岡田氏･大悲山氏らとともに行方郡に下向して、奥州相馬氏の祖となりました。

以後、相馬氏は小高城を処点に所領を拡大し、江戸時代には現在の相馬市中村に城を移して中村藩主となりました。

相馬氏は妙見を氏神として城内や守護神として藩境にも祀り、一族も同様に妙見を祀ったため、領内には妙見ゆかりの神社仏閣や祠が約70か所あります。なお、明治以降の神社では、妙見は天之御中主神として祀られています。

相馬野馬追（神旗争奪戦）

相馬野馬追（野馬懸）

◆まちの自慢

◎**北泉海岸**:年間を通しサーフィンに適した波が発生する海岸であり、世界プロサーフィン連盟や日本サーフィン連盟公認のサーフィン競技大会が開催されており、全国のサーファーにとって有名なサーフスポットとなっています。

◎**福島ロボットテストフィールド**:東日本大震災及び原子力災害により大きな被害を受けた福島県浜通り地域の産業を回復させるための国家プロジェクト「福島イノベーション･コースト構想」に基づき、南相馬市に「福島ロボットテストフィールド」が整備されました。

物流、インフラ点検、大規模災害などに活躍が期待されるロボットの研究開発、実証実験、性能評価、操縦訓練を行うことができる世界に類を見ない一大研究開発拠点です。

福島ロボットテストフィールド

千葉市（ちば）

◆まちの概要

大正10年（1921）に市制を施行し、令和3年（2021）に市制100周年を迎えた政令指定都市です。

東京湾の湾奥部に面し、東京都心部から東に約40㎞、成田国際空港及び木更津市（東京湾アクアラインの接岸地）からそれぞれ約30㎞の距離にあります。

市域面積は約272㎢で、河川によって刻まれた低地と台地、東京湾沿いに広がる約34㎢の埋立地に大別されます。全体的に平坦な地形のため、都市の成長とともに市街化が進みましたが、内陸部には緑豊かな自然環境が残されており、大都市でありながら緑と水辺に恵まれていることが特長です。

また、幕張メッセを中心とした幕張新都心を抱える国際交流都市であり、近年では国家戦略特区の指定を受け規制改革等を活用した新しい挑戦にも取り組んでいます。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

大日寺の千葉家石塔群

千葉は千葉氏の名字の地です。今から895年前の大治元年（1126）に平常重が上総国大椎（千葉市緑区大椎町）から本拠を移し、千葉のまちの礎が築かれました。これによって千葉氏という武士の家が成立したのです。

常重の子の千葉常胤は、石橋山合戦に敗れて房総に逃れた源頼朝を助け、鎌倉幕府の樹立に大きく貢献しました。頼朝から「父と思う」と信頼された常胤は、房総はもとより、北は東北地方から南は九州まで日本列島各地に所領を獲得し、千葉氏を有数の御家人へと発展させました。千葉一族の名前（諱（いみな））に「胤」が多く用いられるのは、常胤の存在の大きさを示しています。こうして常胤の子息たち「千葉六党」をはじめとする一族が各地に広がったことが契機となり「千葉氏サミット」として全国の自治体が集うことになりました。

千葉氏は元寇をきっかけとして南北朝時代には肥前千葉氏が分立するなど、一族間の対立が生じました。しかし、下総千葉氏の当主氏胤は足利尊氏に仕え、さらに勅撰和歌集に歌が載るなど、文武両面で活躍しました。氏胤の子孫たちは戦国時代の下総に大きな足跡を残していくことになります。

室町時代、千葉氏は関東の有力守護大名であり、その館が置かれた千葉は賑わいましたが、戦国の幕開けを告げる享徳の乱の中で一族の対立が起こり、一族の馬加康胤（まくわりやすたね）・原胤房が千葉を攻め、本宗家の千葉胤直たちを滅亡させるという事件も起きました。馬加（千葉市美浜区幕張町）を本拠とした康胤が千葉氏当主を継承しましたが、千葉氏はやがて本佐倉城（酒々井町・佐倉市）へ移ります。しかし、東京湾の湊を擁する千葉のまちは、水陸交通の結節点として、また妙見宮（千葉神社）などの社寺の門前町として、地域の中核的な都市として機能し続けました。

◆まちの自慢

◎**加曽利貝塚**:日本を代表する縄文遺跡。2017年に貝塚として初めて国の特別史跡に指定された日本最大級の貝塚です。
◎**大賀ハス**:1951年に大賀一郎博士が発掘し、開花に成功した世界最古の花。「市の花」に制定されています。
◎**千葉氏**:千葉のまちの礎を築いた武士の一族。中興の祖・常胤は源頼朝を助け鎌倉幕府の成立に大きく貢献しました。
◎**海辺**:戦前は多くの文人墨客も訪れた一大保養地。戦後は日本初の人工海浜「いなげの浜」をはじめ、「検見川の浜」「幕張の浜」が整備され、その総延長は人工海浜としては日本一です。

成田市（なりた）

◆まちの概要

成田市は、千葉県の北部中央に位置する中核都市です。市の西側には根木名川、東側には大須賀川が流れ、それらを取り囲むように広大な水田地帯や肥沃な畑地帯が広がっています。

市の中心部である成田地区は、霊場として名高い成田山新勝寺の門前町として古くから栄えてきました。歴史的建造物が残り江戸情緒あふれる成田山の表参道には、多数の土産物屋や飲食店が軒を並べ、国内外の観光客に親しまれています。成田山新勝寺の他にも、江戸時代の義民・木内惣五郎（佐倉宗吾）を祀った宗吾霊堂など、市内には数多くの寺社が点在しています。

また、市の南部には、年間の空港旅客数が4,000万人を超え、世界100都市以上とのアクセスがある、日本の空の表玄関・成田国際空港を有しており、国際空港都市としての一面も併せ持っています。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

助崎城跡の妙見像

成田市北東部に位置する大須賀地域、尾羽川流域、荒海川流域は、千葉常胤の子息である胤信や胤通が地頭として入府して以降、それぞれ大須賀氏、国分氏を名乗って勢力を張り、戦国時代末期に徳川家康が関東に入府するまで一族の所領として維持されてきました。とりわけ、鎌倉時代、宝治合戦（1247年）の後、大須賀氏惣領としての地位を確立した胤信の孫胤氏は、将軍の近習として活躍し、大須賀氏興隆の基礎を作りました。

戦国時代には当地に多くの城が築かれましたが、大須賀氏の居城とされる松子城跡、大須賀氏の分家とされる助崎城跡の周囲には、「内宿」「新宿」などの小字名があり、戦国時代終わり頃には城下町が形成されていたことが窺えます。また、城跡には千葉氏の守護神である妙見神が鎮座し、助崎城では石造、松子城では木造の妙見像がそれぞれ祀られています。江戸時代に作られたものですが、千葉氏一族の遺領を今に伝えています。

◆まちの自慢

成田山新勝寺、宗吾霊堂、滑河観音の名で知られる龍正院等の歴史的な観光スポットの他にも、新勝寺に向かう表参道には門前町として栄えた成田ならではの食文化が受け継がれており、名物のうなぎ料理を始め、和スイーツが数多くあり、お店めぐりも楽しめます。

成田国際空港周辺には、昭和44年に閉場した宮内庁下総御料牧場の関係資料を展示した成田市三里塚御料牧場記念館の他、駒井野地先の小高い丘には成田市さくらの山があり、さくらの樹の下で飛行機の離着陸を見学することができ、成田の新しい観光スポットになっています。

成田山新勝寺

宗吾霊堂

龍正院

佐倉市（さくら）

◆まちの概要

オランダ風車

佐倉市は、千葉県北部、都心から約40km、成田国際空港から約15km、千葉市から約20kmの距離にあります。面積は約104km²、北部は印旛沼に川が注ぎ、西部は首都圏のベッドタウン、東部・南部は農村地帯が広がる中、工業団地が立地し、緑豊かな自然と都市の利便性を共に享受できるまちです。

自然豊かな北総台地に所在し、北に印旛沼の水面が広がります。印旛沼のほとりには威風堂々としたオランダ風車「リーフデ」があり、チューリップをはじめとした季節の花が美しく咲き、夏には花火も夜空に瞬きます。

佐倉では幾層にも重なる歴史文化を間近に見ることができます。古くは縄文時代の環状盛土遺構を目にすることが出来る井野長割遺跡があり、千葉一族の盛衰を肌で感じる臼井城跡・本佐倉城跡があります。江戸時代には、首都江戸を支える町として栄え、佐倉城跡・武家屋敷・佐倉順天堂記念館・旧堀田邸とその庭園などが残された町並みは、「世界から一番近い江戸」をキーワードに、当時の人々の息吹を伝える日本遺産として、「北総四都市江戸紀行ー江戸を感じる北総の町並み」のひとつに認定されました。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

勝胤寺千葉家供養塔

佐倉市域は、千葉氏と同族である上総介一族の勢力が元来強かった地域ですが、鎌倉幕府を創立した源頼朝が、上総介一族を弾圧し、千葉常胤を登用したことから、千葉氏の勢力があらたに浸透していきます。

戦国時代の初め、千葉氏は内紛によって分裂しました。その戦いに勝利した一派は、本拠地を千葉から佐倉へ移しました。戦国時代に佐倉地域は、太田道灌や上杉謙信、さらには里見氏による武力侵攻を受けますが、千葉氏はその都度危機を乗り越えていきます。しかし、天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻めによって、ついに千葉氏は没落してしまいます。海隣寺や勝胤寺に残される千葉家供養塔は、千葉氏の栄華の痕跡と言えます。

臼井城の妙見堂は、現在も星神社にその信仰が引き継がれており、戦国時代に原氏によって寄進された仏像や釣灯籠に、その信仰を感じることができます。また、六崎にある妙見神社も地域で大切に守られています。令和2年3月には、臼井城主であった臼井興胤のお手植えと伝わる「宝樹院のサザンカ」が市指定文化財となりました。

◆まちの自慢

◎平成28年、成田・佐原・銚子とともに「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として日本遺産に認定された城下町の風情を残す歴史的町並みがあります。

◎市北部の印旛沼は佐倉市の自然風景の象徴です。印旛沼周辺には、農業体験施設「佐倉草ぶえの丘」やオートキャンプ&テニス場「印旛沼サンセットヒルズ」、長嶋茂雄記念岩名球場や小出義雄記念陸上競技場を有する「岩名運動公園」といった、自然に囲まれた観光・スポーツ施設があります。

◎およそ100種72万本のチューリップが咲き誇る「佐倉チューリップフェスタ」や、直径約500mの大輪を咲かせる二尺玉や、音楽と連動して10分間で8,000発を打ち上げるビッグプレミアムスターマインが楽しめる「佐倉市民花火大会」、江戸時代から続く長い伝統を持つ「佐倉の秋祭り」など、四季折々のイベントが充実し、市内外の皆さんにお楽しみいただいています。

◎幕末から明治期にかけて、日米修好通商条約締結交渉の幕府側責任者である堀田正睦、佐倉順天堂を開設した蘭医の佐藤泰然、洋画家の浅井忠、農学者の津田仙、近代女子教育の先駆者である佐藤志津など、多数の先覚者を輩出しており、現代でも、佐倉親善大使である、高橋真琴さん（画家）、荻野目洋子さん（歌手）、佐藤優香さん（トライアスロン選手）に代表される有名人ゆかりの地となっているほか、市民音楽ホールや美術館などを有する文化・芸術・スポーツが盛んな好学進取の風土があります。

酒々井町（しすい）

◆まちの概要

まるごとしすい
酒々井アウトレットのとなりにオープンした情報発信・アンテナショップ

酒々井町の町名は「そのむかし孝行息子が汲むと井戸の水が酒になった」と伝わる孝子酒泉の「酒の井」が町名の由来です。

明治22（1889）年に町村制が施行され、その後、自治体合併を経ず現在に至る日本で一番古い町です。町の面積は約19km²と小規模ですが、千葉県の北部、都心から50kmの圏内にあって、鉄道や道路などの交通網、新東京国際空港に隣接するなど好立地条件を備え、北西には印旛沼、東南には北総台地が拡がる緑豊かな自然環境にも恵まれています。

歴史的には3万4千年前の日本最大級の環状集落跡である国史跡「古沢遺跡」や千葉氏の居城跡の国史跡「本佐倉城跡」、徳川幕府直轄の「野馬会所跡」、佐倉藩城下町で成田山や芝山参詣客の宿場町「酒々井宿」の名残などが町中にあり歴史と文化を伝えています。

酒々井町では少子高齢化という時代の流れの中にあっても、恵まれた環境を活かし経済、社会のバランスがとれた持続可能な町、おしゃれで高品質なコンパクトシティを目標にまちづくりを進めています。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

文武の名将 千葉勝胤

伝千葉勝胤肖像画 勝胤寺所

千葉勝胤は第三代の本佐倉城主、和歌集『雲玉和歌抄』の前書きに「平のなにかしと申したてまつりて弓馬の家にすくれ、威を八州にふるい、諸道に達して政を両総におさめ、中にも大和歌に心をよせて佐倉と申す地にさきくさのたねをまき給う（勝胤は文武に優れ、名声も高くとりわけ和歌を好み佐倉に繁栄の種を蒔いた）」と紹介されています。

勝胤は千葉家の当主として約30年間にわたり下総の頂点に君臨し、古河公方や小弓御所、上総武田氏・安房里見氏等との戦いのなかで千葉氏と本佐倉城下の繁栄を築きました。

その足跡は「千葉妙見社での嫡男の元服式」、「佐倉歌壇の主催者」、「菩提寺・勝胤寺の建立」、「城と城下町の整備」などが挙げられ「文武の名将」にふさわしい武将であり、九代・百余年に及ぶ本佐倉城主のうち最も多くの物語を今に伝えています。

永正2年（1505）11月15日、千葉妙見社で嫡男・昌胤の元服式を盛大に行い、千葉氏の勢力を誇示し威信を高めました。

永正11年（1514）、和歌集『雲玉和歌集』を編さん、家臣らと歌壇をつくり四季折々に和歌の会を開き、本佐倉城下を文芸活動の盛んな文化的な場として発展させています。

亨禄元年（1528）、城下浜宿（大佐倉）に千葉氏菩提寺「常巌山勝胤寺」を建立します。城下には「常勝山妙胤寺」、「梅勝山東城寺」など勝胤の名前を配した寺院があります。

◆まちの自慢

「史跡本佐倉城跡案内所」がオープン

史跡本佐倉城跡案内所

令和3年1月に本佐倉城跡に集う地域住民・ボランティアガイドと来訪者が交流する歴史・自然創造拠点として、城跡の観光資源としての利活用を目指し本佐倉城跡の東山馬場に「史跡本佐倉城跡案内所」をオープンしました。

案内所では本佐倉城跡や千葉氏の歴史を学べるガイダンス展示・パンフレットの配布、本佐倉城跡とキャラクター「勝っタネ!くん」グッズや御城印などの販売、続日本100名城スタンプ、ボランティアガイドとの城跡散策などで皆様の来場をお待ちしています。

多古町（たこ）

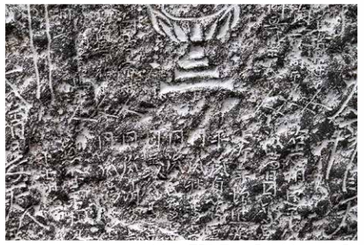
◆まちの概要

多古町は、千葉県の北東部に位置し、東西約13.6km、南北約12.9km、面積72.80㎢と、県内町村の中では2番目の広さを誇る町です。町の中央を流れる栗山川の流域に広がる水田地帯は、食味日本一にも輝いた「多古米」の一大産地となっています。また、この流域では古くから縄文時代の丸木舟などが多数発見され、低地遺跡として全国的に知られています。一方、台地上に広がる畑で栽培されている「大和芋」は、全国有数の生産量を誇り、多古米と並び、町の農産物ブランドになっています。

古刹日本寺や栗山川のあじさいが鮮やかに色づく初夏には、「ふるさと多古町あじさい祭り」が盛大に開催され、多くの観光客が押し寄せ賑わいを見せます。江戸時代から続く夏の風物詩「多古祇園祭」は、お囃子や威勢のいい掛け声とともに山車が引き回され、山車の上では鮮やかな舞が彩りを添えています。

自然と文化、歴史に恵まれた多古町は、成田国際空港にも隣接し、やすらぎを感じる過ごしやすい町です。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと


妙光寺板碑拓本部分（主銘文部）

千葉氏一族の勢力が下総一帯に及んでいた中世、多古は千葉氏の荘園「千田荘」の中心地でした。千葉氏の勢力が全国に及び隆盛を極めると一族間では争いが度々起き、「千田荘」もその戦いの舞台となりました。室町時代中期の享徳の乱で、千葉家当主胤直は同族の原胤房･馬加康胤と戦うことになります。康正元年（1455）、胤直は原胤房に千葉城を急襲されて千田荘に逃れましたが、両軍の攻撃に多古城、志摩城とも落城しました。胤直父子は自害し、千葉を追われた宗家はここで滅亡します。土橋城近くの東禅寺墓地には、胤直ほか一族の墓と伝わる五輪塔があり、地元の人たちに懇ろに供養されています。

鎌倉時代末から南北朝期にかけて千田荘を治めていた武将に千葉（千田）胤貞がいます。胤貞は、足利尊氏方の武将として戦い、室町幕府の成立にも大きく貢献しました。

当時、千葉宗家は蒙古襲来に備え領地のある九州に下り、肥前国小城郡で守りについていました。胤貞の祖父頼胤が、文永の役（1274）の傷で亡くなった後、父宗胤が九州に下り九州千葉氏の祖となりました。胤貞は、正応元年（1288）この小城郡で誕生しました。宗胤は、胤貞がまだ8歳と幼い時に亡くなり、宗家は東国にあった宗胤の弟胤宗へと移りました。その後、胤宗の嫡子貞胤と胤貞は度々覇権を争い下総国に争乱が広がって行きました。胤貞は、千田荘の「窪（久保城）」に居館を持ち、周辺には防衛拠点として分城、中城を築いたといいます。後の建武3年（1336）、尊氏と敵対する後醍醐天皇方の武将として戦っていた千葉宗家の貞胤は越前で降伏し、胤貞が鎌倉まで護送することになりましたが、途中の三河で病に倒れ49歳で亡くなりました。

胤貞は熱心な日蓮宗信者で日本寺を創建するなど、後の高僧日祐を養子とし日蓮宗を深く庇護します。領地の肥前小城には千葉城を築くとともに、日祐を開山とする光勝寺を創建します。

胤貞の足跡は、中城跡近くの竹林山妙光寺と東福寺の板碑に見ることができます。妙光寺の応永33年（1426）銘の板碑は胤貞流一門を供養したもので胤貞以下胤満までの6人の名が刻まれています。東福寺は嘉吉2年（1442）銘の板碑で、胤貞已来の先祖供養との主旨が刻まれています。

◆まちの自慢

多古町は、子育てにやさしい町です。「多古の子　町の子　みんなの子」をスローガンに、待機児童「0」、こども園･小中学校の給食費「0」、高校生までの医療費「0」の3つの「0」や、第1子･第2子出産祝金10万円、第3子以降出産祝金総額100万円相当の支給など、さまざま支援制度を用意しています。おかげさまで多古町は※「住みたい田舎」ベストランキング“子育て世代が住みたい田舎部門”町ランキング全国第8位、千葉県第1位を獲得しました。　※宝島社「田舎暮らしの本」2021年版第9回ランキング

東庄町（とうのしょう）

◆まちの概要

東庄町は、千葉県北東部、東京から約80km圏、成田から約30km圏の位置にあり、銚子市や香取市、旭市と接しています。面積は、約46㎢、温暖な気候で、平均気温は約16度、冬の間は東京より2～3度暖かく、夏は逆に涼しい町です。北西には八溝山地の末端にある筑波山を臨み、本町を含む一帯は水郷筑波国定公園の区域に属しています。

雲井岬つつじ公園や東大社、東庄県民の森では、町の木「オオムラサキ」が色鮮やかに咲きほこり、訪れた人々の目を和ませます。ほかにも、のどかな田園風景の中で楽しめるいちご狩り、農業体験、農産物の朝市、ウォーキング、サイクリングなど、自然を存分に満喫できる町、それが東庄町です。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

妙見菩薩立像

千葉常胤の6男胤頼は幼い頃から武術に励み、やがて京に上り鳥羽上皇の第3皇女･上西門院に仕え和歌を学び、文覚上人に師事して文学、歴史を学ぶほか、都の政治にも関心を傾けました。源頼朝の挙兵にはいち早く下総に戻り、常胤に京の政治情勢を報告し軍事面でも才能を発揮しました。

常胤は、守護に命ぜられたのを機に6人の子息にそれぞれ領地を与え、胤頼には東荘33郷（今の東庄町とその近隣）が与えられ東氏を名乗りました。また、胤頼が尊崇する妙見像を安置し本尊にしたとされる妙見山星福寺吉祥院や、東氏に伝わったとされる木造妙見菩薩立像（県指定有形文化財）など妙見信仰が受け継がれました。

その後東氏は、長男重胤へ受け継がれ3代将軍源実朝に近侍し、その子胤行は承久の乱で功績を上げ、美濃国山田庄（岐阜県郡上市）を拝領し両所を統治しました。

◆まちの自慢

笹川の神楽

◎**笹川の神楽**:建久2年（1191）千葉成胤、源頼朝の武運長久を祈り、千座神楽を奏したのが始まりと言われています。千葉県の無形民俗文化財に指定されています。

◎**雲井岬つつじ公園**:おおむらさき、やまつつじ、琉球など約3,000本のつつじが植えられています。

◎**白鳥**:夏目の堰（八丁堰）には、毎年1,000羽を超える白鳥が飛来します。

◎**東庄町産SPF豚肉**:豊かな自然と生産者の情熱が生み出す豚肉の品質と美味しさは一級品です。

◎**いちご**:1月上旬から5月中旬まで、町内6つのいちご園で希少品種「アイベリー」など、いちご狩りが楽しめます。

◎**こかぶ**:千葉県は全国第1位（農業産出額）の中、当町は県内第2位の生産を誇ります。

郡上市（ぐじょう）

◆まちの概要

郡上市は、郡上郡の八幡町･大和町･白鳥町･高鷲村･美並村･明宝村･和良村の7町村が合併して平成16年（2004）に誕生しました。日本列島そして岐阜県のほぼ中央部に位置し、面積約1,030㎢に人口約4万2千人が住む山間の市で、海抜が110メートルから1,810メートルまでと高低差が大きく、市の中央を北から南に流れる長良川をはじめ24本の一級河川があり、雄大な自然と美しく豊かな水に恵まれています。

また、市内には東名･名神高速道路と北陸自動車道とをつなぐ東海北陸自動車道が長良川に沿って走っており、比較的交通アクセスに恵まれた地域です。

奥美濃の小京都と言われる郡上八幡には、400年を超える歴史を持ち日本三大盆踊りの一つに数えられる「郡上おどり」があり、お盆の4日間は翌朝まで踊り明かす徹夜おどりで賑わいます。また冬季には、西日本トップクラスのウインターリゾート地として、市内10のスキー場数を誇ります。平成27年（2015）12月に、郡上市を含む長良川上･中流域の「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されるなど、お国自慢は尽きません。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

千葉常胤の息子「千葉六党」の6男･胤頼は、下総国東庄（千葉県東庄町）を領し、東を名乗りました。胤頼の孫にあたる胤行は、承久の乱の功績により美濃国郡上郡山田庄（岐阜県郡上市）を与えられたとされ、東氏は下総国東庄と美濃国郡上郡の二つに分かれました。

東常縁像（乗性寺所蔵）

古今伝授の里フィールドミュージアム

郡上東氏は代々和歌に優れており、中でも室町時代の9代目･東常縁は、当代きっての歌学者で、古今和歌集の解釈を秘伝する「古今伝授」の形式を整え、「古今伝授の祖」といわれました。

永禄2（1559）年、郡上東氏は一門の遠藤氏に城を追われ、三百余年の歴史に幕を閉じました。

現在、郡上東氏の居館跡「東氏館跡庭園」（国名勝）一帯は、東氏記念館、和歌文学館などを配した「古今伝授の里フィールドミュージアム」として整備され、和歌･短歌のまちづくりの拠点となっています。

◆まちの自慢

郡上市は自然に恵まれ、面積が広く、標高差も大きいので、歴史、自然の魅力も多彩です。古代の山岳信仰「白山信仰」、中世の「東氏」、近世･近代の城下町「郡上八幡」など、各時代の文化遺産があります。また、ウィンタースポーツ、清流長良川のウォーターアクテビティなど一年を通して自然を楽しめます。ジビエ、どぶろく、日本一の和良鮎･郡上鮎などの食の魅力も満載です。

千葉氏の一族東氏ゆかりの文化遺産も市内各所にあります。大和地域の、阿千葉城、篠脇城、東氏館跡庭園（国名勝）、明建神社（妙見社）などを中心に、美並地域には東胤行開基の乗性寺（戸谷庵）や北辰寺、和良地域には東常縁の父･益之ゆかりの和良殿屋敷などがあります。八幡地域には、東氏最後の居城･赤谷山城跡があります。城下町･郡上八幡を整備した江戸時代初期の遠藤氏は、東氏の一族で、遠藤常友は東氏一族を顕彰し、宗祇水（白雲水）などを整えました。このように、東氏ゆかりの文化遺産をめぐるだけでも、一日たっぷり満喫することができます。

国名勝東氏館跡庭園

中世の馬場跡と伝わる「妙見の桜並木」（明建神社横参道）

小城市（おぎ）

◆まちの概要

小城市は、佐賀県のほぼ中央部にあり県庁所在地･佐賀市に隣接しています。福岡市へ70km、長崎市へは100kmの距離にあります。地勢的には、北部に天山山系がそびえ、中央部には肥沃な佐賀平野が開けています。南部にはクリーク地帯が広がり、日本一の干潟･有明海に面しています。天山山系に源を発する祇園川･晴気川･牛津川は平野部を潤し、嘉瀬川及び六角川に合流し、有明海へと注いでいます。

気候は、夏は高温多湿でやや蒸し暑く、冬は乾燥した北西の季節風（天山おろし）が強いのが特徴で、天山県立自然公園、ムツゴロウ･シオマネキ保護区に代表される貴重で豊かな自然資源を有しています。小城市の面積は、95.81㎢で県土の3.93パーセントを占めています。

◆千葉氏ゆかりの人物やできごと

閑室元佶像
佐賀県重要文化財 三岳寺蔵

鎌倉時代後期に下向し、小城を拠点とした千葉氏は室町、戦国時代に肥前国の中枢部に勢力を及ぼしました。朝鮮国で15世紀に著された『海東諸国紀』によると当時小城には民居一千二百余戸、正兵五百を擁するなど千葉氏の拠点として北部九州を代表する都市であったことがわかります。現在も市内には千葉氏の城館跡、寺社、仏像、歴史資料が伝わり、繁栄した千葉氏の歴史･文化を知ることができます。

千葉氏ゆかりの人物としては、閑室元佶（1548～1612）がいます。元佶は千葉胤連の子とされ、幼少期に千葉氏の菩提寺である臨済宗寺院円通寺の塔頭養源院で出家し、その後諸国を遊学しています。天正元年（1573）頃、坂東の大学と称された下野の足利学校に入学し、天正14年（1586）には第9代庠主となり16年在職しました。徳川家康に知られ、家康は元佶に古書200部、木活字10万個を与え、元佶は家康の命により京都の伏見で『孔子家語』、『貞観政要』、『武経七書』などを刊行しました。これらの書物は「伏見版」と呼ばれています。慶長5年（1600）には家康に従い、関ヶ原の合戦に出陣しました。元佶は家康の顧問として外交、社寺行政に携わりました。

関ヶ原の合戦では、肥前の鍋島勝茂が徳川家康の東軍方と敵対する立場をとったにも関わらず、鍋島家が存続できたのは、元佶の取り成しによるところが大きかったといわれています。鍋島直茂･勝茂父子はその返礼として医王山三岳寺（小城町）を建立し、元佶を開山としました。

◆まちの自慢

本市は、令和2年6月、「砂糖文化を広めた長崎街道～シュガーロード～」をつなぐストーリーが日本遺産に認定されました。本市においても新たな地域活性化の起爆剤として、関係自治体とともに全国に情報発信を行っているところです。

そして、本市には銘菓「小城羊羹」があります。小城羊羹は表面は硬く砂糖のシャリ感が残り、中は滑らかな舌触り、ふんわり漂う小豆の上品な香りと豊かな風味が特徴です。

その他にも、清流が生んだ「鯉料理」、「全国名水百選」に選ばれた清水川の夏でも冷たい水にさらされた鯉。薄く切った「鯉のあらい」はオリジナルのみそだれでさっぱりとした味わいです。

南は、有明海に面し、日本一の海苔の生産地でもあります。

本市にはまだまだ多くの特産品や名所がございます。

ぜひ、お近くにお越しの際は、「天山（やま）」から「有明海（うみ）」まで水でつむぐ佐賀県小城市へお立ち寄りください。

千葉氏や妙見にゆかりのある祭礼など

一関市

唐梅館絵巻

長坂商店街、唐梅館総合公園

9月下旬

天正18年（1590）、小田原参陣に従うか否かを決するため、周辺の各諸将が唐梅館に集結し開かれた軍議の様子を再現する、戦国乱世の心意気を伝える祭礼です。毎年、総大将役の千葉広胤公を有名俳優等が務め、参上行列、軍議再現が行われる他、千人踊りや餅まきなど多様な催しで観客を楽しませています。

涌谷町

涌谷町古式獅子舞

妙見宮（現在は神明社）・城山公園など

9月第1週土曜日・4月第3週日曜日

胴に涌谷伊達家の家紋である「月二九曜紋」が施された2頭の獅子・狛犬が稚児にあやされ、ゆるやかなお囃子にのって舞います。最古の記録は文久2年（1862）で、妙見宮の宵祭りや町内のイベントなどで演舞します。

【古式獅子舞】
涌谷町指定無形民俗文化財となっている伝統芸能です。

相馬市・南相馬市

相馬野馬追

福島県相馬地方・双葉地方北部
（江戸時代の中村藩領内で、祭礼の主体は相馬三社）

7月最終土日月の3日間

1日目は旧中村藩領内から神輿と騎馬が出発するお繰り出し、原町区の雲雀ヶ原祭場地で宵乗り競馬。

2日目は原町区市街地でお行列（約400騎）、雲雀ヶ原祭場地で甲冑競馬、神旗（しんき）争奪戦。

3日目は相馬小高神社で神馬を奉納する野馬懸（のまかけ）。

福島県指定重要有形民俗文化財
相馬野馬追図屏風（部分）南相馬市博物館蔵

千葉市

妙見大祭

千葉神社及び同社周辺地域

8月16日から22日

千葉神社の由緒によれば大治2年（1127）の平常重の時代から一度も途切れることなく続く祭りです。8月16日の神輿の「宮出し」から22日の「宮入り」まで7日間かけて行われるのは妙見と縁が深い北斗七星に因むものです。

この期間は「一言願をかければその願いは必ず達成される」と言われ、「一言妙見大祭」とも呼ばれています。

御浜下り（おはまおり）

中央区中央港千葉ポートパーク周辺

8月20日

千葉神社の妙見大祭の一環として行われていましたが、戦後、寒川神社が神輿を新調したことをきっかけに、同社の例祭として行われるようになりました。「妙見様が海に入らないと漁がない」という言い伝えがあるほど、漁業に支えられた当地域の生活に密着した行事でした。出洲海岸の埋立てにより一時中断しましたが、氏子の方々の努力と多くの関係者の協力により平成12年に復活しました。

妙見（みょうけん）とは…

仏教と一体化して妙見菩薩とも呼ばれ、その起源は中央アジアの遊牧民の北極星信仰といわれています。それが中国で道教や仏教を取りこみ、やがて日本に伝わりました。

妙見は、天空から人を見守り、方角を示し、人の運命を司る神として信仰されました。

千葉氏の関係者が編さんしたといわれる『源平闘諍録（げんぺいとうじょうろく）』には、北の空にあった妙見が戦場に現れ、勝利を導く軍神として描かれています。千葉の妙見は、それまでの穏やかな姿とは異なり、甲冑をまとい、剣を持つ勇壮な姿で現れます。北条氏に上総千葉氏を滅ぼされ、その領地を奪われた千葉氏が、この危機を乗り越えるため、妙見を軍神とすることで一族の団結を図ったためと考えられています。

妙見を厚く信仰した千葉氏は、一族が移住する時には必ず妙見を伴いました。　かつて千葉氏の領地であった地域には、妙見をまつった神社が今も多く見られます。

酒々井町

酒々井・千葉氏まつり

中央台公園、中央公民館

10月

酒々井町に千葉氏が本佐倉城を築き、城下町ができたのは延徳2年（1490）8月12日のことでした。この日以降、昭和初期まで本佐倉城の鎮守である八幡神社（佐倉市大佐倉）祭礼が酒々井町を会場に行われてきました。なかでも明治まで行われた風流祭り「馬鹿乗り」と野馬追を模した「競馬」からなる祭礼は全国的にも事例はなく、酒々井町だけで行われてきました。長らく途絶えていましたが平成28年に「酒々井・千葉氏まつり」として復活しました。

多古町

妙見尊大祭

妙印山妙光寺

6月15日

かつて大原内（だいばらうち）地区にあった法福寺の妙見堂に祀られていた「妙見菩薩倚像」を特別開帳し、妙光寺住職により祈祷が行われます。簡素な行事で妙光寺に関わる地域の方々だけが集まります。

なお、現在法福寺は廃寺となり、妙光寺に合祀されています。

郡上市

七日祭（なぬかびまつり）

明建神社

8月7日

承久3年（1221）に東氏が下総国から妙見信仰とともに伝えたと言われています。毎年8月7日（昔は7月7日）に明建神社の例祭として行われています。神事や神輿の渡御に続いて、境内で奉納される三つの舞はまことに素朴な舞で、古い田楽の形を伝えています。

小城市

おくんち

北浦妙見社

10月

昭和40年代まで社で神事を行い、にわかを上演していました。赤飯の「ごっくうさん」をお供えしていました。籠もり堂には「わっかもん」が寝泊りをしていました。おくんちは輪番制で、「つうわたし」という儀式があり、一升酒を茶碗で飲み、刻んだ生だいこんに塩をつけ食べていました。

他に初祭り、霜月まつりがあります。

ひつけ

西晴気妙見社

8月

祭壇が設けられ、参道にご神燈を灯します。近くの人がお参りに行きます。むかしは青年団が行なっていました。豆を煮たり、イモジ（水芋を煮たもの）を作り、お神酒をいただいていました。四角い板をひし形にしてその回りにマルボーロを供えていました。その配置が九曜紋に似ていたそうです。

小城祇園祭

須賀神社付近

7月第4日曜日

700年以上の歴史を持つ祭りで、3台の山鉾を下町交差点から須賀神社まで曳き、奉納を行います。小城の町を造った千葉胤貞が、軍事訓練を兼ねて山挽き神事を行ったことを起源とし、五穀豊穣、疫病退散、地域の安全を祈願する祭りとして、千葉氏衰退後も、小城藩主となった鍋島家によって受け継がれ、今日に伝わっています。　力強い掛け声や締太鼓の音色が響き渡る風景は、小城の夏を彩る風物詩です。

千葉氏の流れをくむ有名人物

山内一豊の妻（1557～1617）

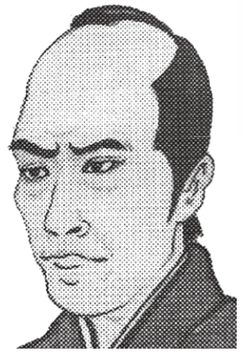
信長･秀吉･家康に仕え、土佐藩主となった戦国武将･山内一豊を支えた妻。
一豊は妻の内助の功によって出世できたとも言われている。
司馬遼太郎の歴史小説「功名が辻」では一豊の妻が主人公として描かれ、2006年には大河ドラマとして放映された。
※作中では一豊の妻の名前は「千代」とされているが、一説によるものであり、本名は不明。
一豊の妻は長い間その出自は不明であったが、近年、郡上での研究が進み、千葉氏･東氏の流れをくむ遠藤氏の娘だったということが明らかになった。また、母方の祖父は郡上の領主･東常慶であった。

伊達安芸宗重（1615～1671）

仙台藩で起こったお家騒動「伊達騒動」の主要人物。
千葉常胤の3男･武石胤盛の流れをくむ涌谷伊達家第四代館主。
寛文7年（1667）、宗重と登米領主･宗倫の間で起こった領地争いにおける仙台藩の裁定の不正をきっかけとして、藩政を牛耳っていた伊達兵部一派の不正の数々を幕府に訴えた。詮議の途中で仙台藩の家老･原田甲斐の凶刃に倒れたが、宗重の身命を賭した訴えは幕府に通じ、仙台藩の安泰を成し遂げた。この事件は「伊達騒動（寛文事件）」とよばれ、浄瑠璃や歌舞伎の題材となった。

佐倉惣五郎（?～1653）

江戸時代初期の下総国印旛郡公津村（現･成田市台方）の名主。姓は「木内」。千葉一族で重臣であったが、帰農して村の指導的な存在となった。「佐倉惣五郎」は佐倉藩に住む惣五郎の意味。佐倉藩の厳しい重税から農民を救済するため、再三にわたって藩へ減税を訴えたが取り上げられず、承応元年（1652）、四代将軍徳川家綱に直訴し、死罪となった。惣五郎の生き様は人々に伝承され、説話や芝居となり歌舞伎としても上演された。福沢諭吉は「学問のすゝめ」において「人民の権利を主張し、正理を唱えて政府に迫り、その命を捨てて終をよくし、世界中に恥じることのない」人物として、惣五郎を絶賛している。



千葉周作（1793～1856）

北辰一刀流の開祖、撃剣隆盛の礎を築いた剣師。
様々な講談や時代劇、小説にも書かれた千葉氏の末裔だが、謎多き人物で、出生地だけでも気仙沼をはじめ諸説あり、いまだ確定されていない。
周作は、家伝の千葉介常胤を開祖とする「北辰流」に、「一刀流」を融合させた独自の「北辰一刀流」を掲げ、神田お玉が池に玄武館を立ち上げた。実利を追求した指導で上達が早いと評判を得、流派は隆盛を誇った。
水戸藩の剣術師範となり、「烈公」徳川斉昭からも高く評価された。

江藤新平（1834～1874）

明治初期、法制度を確立した維新十傑。江藤氏は肥前千葉氏の子孫で、佐賀藩鍋島家に仕えた。新平の諱は「胤雄」。
明治維新後、初代司法卿（現在の法務大臣･最高裁判官･国家公安委員長に相当）に就任し、司法制度の創設に取組み、「人民ノ権利ヲ保護スル」ことを目的に、「司法省の方針を示す書」を執筆。これに基づき、日本の司法制度の土台ともなる「司法職務定制」を制定した。その後も司法制度の確立に尽力したが、明治6年（1873）の政変で官職を辞職。政情不安であった佐賀へ帰り、佐賀の乱に参加し、敗走後佐賀で刑死した。

新渡戸稲造（1862～1933）

新渡戸家の祖は、千葉常胤の孫の常秀（上総千葉氏）とされる。
札幌農学校教授、京都帝国大学教授、東京帝国大学教授などを歴任。「学問より実行、理論より実践」を提唱し、数多くの弟子を育成した。
国際連盟（現国際連合）の事務局次長も務め、キュリー夫人やアインシュタイン博士とも親交があり、知的協力委員会（現ユネスコ）を組織した際にはその事務を担当した。
国内では女子教育に尽力し東京女子大学設立に携わり初代学長を務めている。
彼の著書「武士道」は現在50～60か国語に翻訳されており、日本を代表する国際人である。
1984年から2007年まで発行されていた、日本の5000円札の顔としても有名。